委員長（冒頭あいさつ）

皆さん、おはようございます。本日は皆様お忙しい中、第3回の平和宣言文起草委員会にお集まりいただきまして、誠にありがとうございます。前回の第2回の起草委員会におきましては、前回お示ししました素案に対しまして、皆様方から様々なご意見を賜りました。ありがとうございます。そのご意見を踏まえまして、今回修正案を作らせていただき、そして皆様方に事前にお送りさせていただいております。文案の方は後ほど読み上げさせていただきますが、前回お示ししましたとおり、前半部分、冒頭の方ですね、被爆者の詩を引用しながら、厳しさを増す国際情勢への危機感を共有する内容になっております。

それに加えて、今回皆様方の前回のご意見を踏まえまして、中段部分にも再度、被爆者の詩を引用しております。被爆者の言葉を借りながら、核兵器廃絶を強く訴える、そしてどんなに陰しくても、対話と外交によって粘り強く平和を実現していく、その決意を述べたいと思っております。

それから、これも前回いただいたご意見を踏まえながら、若い世代を中心とした動きに言及して、そして長崎からの未来に向けたメッセージということで、様々な違いを超えてつながり合えば、私たち地球市民は必ずや思い描く未来を実現することができるんだ、そういう呼びかけで締めくくるとなるとなっております。

是非今日もまた皆様方から、忌憚のないご意見を賜ればと思いますので、どうぞよろしく願いいたします。最後、この第3回の起草委員会のご議論を踏まえて、本日いただいた意見をベースとしまして、最後の仕上げを行っていきたいと思っておりますので、その点も踏まえながら、本日はどうぞよろしくお願い致します。ありがとうございます。それでは、議事を進行させていただきます。先ほど事務局からも申し上げましたが、今回はお配りしております平和宣言文案をもとに、委員の皆様からご意見をいただきたいと思っております。まず、私の方から平和宣言文案を朗読させていただきます。それでは、読み上げさせていただきます。

（文案の朗読）

以上です。平和宣言文案は事前にお送りいたしまして、ご覧になっていることと思っておりますので、今からそれぞれの委員の皆様からですね、ご意見をいただきたいと思っております。それでは、委員から時計回りをお願いします。よろしくをお願いします。

委員

はい、ありがとうございます。宣言文案に関しまして、もういよいよ完成に近づいたという印象をもっておりますけれども、最初に福田須磨子さんの詩の訴える力、凄まじい力を改めて感じております。この詩が冒頭に出てくることによって宣言の訴える力、引きつける力は、より強いものになっているなど、これは感想でございます。

細かいことなんですけれど、47行目の、「地球という1つのまちに住む地球市民です」という、これ好みだと思うんですけど、1つの「星」でもいいのかないかと思いました。皆様のご意見や市長のご判断で、特に変えるべきだという意見ではございません。

あとですね、62行目から63行目、その前のパラグラフで、ワン・ヤング・ワールドを取り上げていただいて、そこで平和を目指す若者の力が出てくるわけですね。その段階、56行のところでは1つは、「今年初めて開催されました」という中に、長崎で、というのを入れたらどうかということと、55行のところでは「国際会議ワン・ヤング・ワ

ールドのうち」、これは「ワン・ヤング・ワールドの」だけでも、「のうち」というのはいらなかなと思いました。

あとですね、62行目から、たとえ一人ひとりの力は小さくても云々という文章になるんですけども、せっかく若者の平和の動きの台頭の話を読き起こしているの、これは今のいわゆる高校生の署名活動平和大使のキャッチフレーズになっている、「微力だけど無力じゃない」という言葉があって、これ自身はもう既に私の感覚では、こういう運動をしている人の共通の言葉になりつつあると感じますし、その言葉が使えないのかなと。そうすると高校生の頑張ってくれている人たちも透けてみえる文章になるだろうし、どうせこういうことを言うのであれば使えないかなと思いました。以上です。

委員

はい、ありがとうございます。私はとても、ほとんど完成度が高くて、それほど申し上げることもないなというのが率直に思っているところでございます。

1点だけですね、52行目の「国際社会が目指すSDGsの目標を超越した『人類が生き残るための絶対条件』なのです」と、超越するという言葉がSDGsをやっている人たちにちょっと不快感というんですかね、そんな核兵器のことばかり、といういらぬ反発もあると、本心じゃないなという気がしますので超越という言葉じゃない表現で趣旨が伝わるといいなと思えます。例えば、思いつきでそれがいいというわけではないのですが、SDGsの目的をずっと続けて反映するためにも、核廃絶が絶対条件だという趣旨に変えた方が、並列して向こうの努力も称えながら、このことを忘れていってはやはり、本来達成すべきものが一瞬にして無になってしまうというような趣旨が伝わるといいかなと思いました。ありがとうございます。

委員

私もかなり完成度が高い内容になっていると思っております。その中で1つは、40行目からの唯一の戦争被爆国である日本政府は核兵器のない社会を真摯に追求するためにも、やはり去年の広島サミットで核抑止論が肯定されたような、そういう動きが日本政府によってつくられたと思うんですよ。だからそういうやっぱり、核抑止論を乗り越えて、やはり禁止条約へということが大事なんじゃないかと思えます。それから42行目ですね。日本国憲法の平和の理念を堅持するとともにということでもとめてあるのですが、約10年ぐらい、日本の自衛隊の質が変わってきた。それはやはり安倍首相が閣議決定で憲法解釈を変えてしまった。そういう中で軍事費も倍化されているし、それからやはり敵基地攻撃能力という状態になっていると思えます。私たちはやっぱり新しい戦争前夜、そういう感じがするわけですよ。だからその点をもう少し日本の軍事力の拡大というか、そういったところをちょっと入れてほしいなと思えます。それと44行目の被爆者の援護があるわけですけども、やはり私たち被爆者は国家保障に基づくということをずっと要求してきているわけです。それは1980年に茅誠司さんを座長として原爆被害者のことに対する基本問題懇談会というのがあってそこで受忍論というのが出てきたわけですね。どんな地獄を味わおうとも、命を奪われようとも、財産を奪われようとも我慢しなさいと。それはずっと今の憲法でもそういったことが、戦争について我慢せよとなっていること自体が、この平和憲法でも許されるというか、絶対それは許されない。やはり国が起こした戦争責任をちゃんと取らせるために、私たちは国家保障に基づく援護法、それから、約80万から90万の日本の一般国民の人が亡くなっていったわけですね。それに対して国は一切の保障もしていない。ただ、軍人、軍族、そういった人には、恩給制度でつくっていますけれども、やはりそういったことについても受忍

論というのがね、はっきりでてきて、それが前面に日本政府の被爆者援護に対する前進がない、というところじゃないかなと思います。だから、私たち被爆者は国家補償に基づく援護をつくっている、つくってほしいというところを訴えてほしい、それから、被爆体験者のこと、色々なマスコミの報道によると長崎の被爆体験者は救われないような状態になってきていると。それは、平和祈念館のいわゆる 3000 数百名に及ぶ調査をしたわけですが、その中で黒い雨が降ったという記述が非常に少ないということで、それから戦後長く経ったから、そういう文章も装飾されているんじゃないかなと、そういう判断で被爆体験者のことが改善されないということですが、やはり、もう政府に政治的解決をせまるというような文言を私は入れてほしいと考えています。以上です。ありがとうございました。

委員

前回色々な意見が出た中で、よくまとめていただいてありがとうございました。個人的な意見としていくつか感じたことを述べさせていただきます。

まず 40 から 45 行目のところですが、日本政府の核廃絶に向けた主導的役割を果たす、そういうことを求めた段落で、ここは非常に大事な部分だなというふうに感じています。ここですね、やっぱり日本、唯一の被爆国、それから日本国憲法の下での 79 年にわたる不戦と、これ大事なところが押さえられていて、そういったところから世界が向かうべき方向、普遍的な価値、そういったものを示している、そういう段落だと思うんですが、42 行目の「日本国憲法の平和の理念を堅持するとともに」というところが若干抽象的で、内実が見えてこない。ここは委員と同じですが、この前に、例えば、「自らが軍備の縮小を実現することで」とかですね、そういう具体的な文言が入るといいのかなというふうに感じました。

それから、44 行目から 45 行目については、2 点ほど述べたいことがございます。1 つ目は被爆者と被爆体験者の問題です。「1 日も早い被爆体験者の救済」という文言ですけれども、そもそも被爆者と被爆体験者の使い分けは、日本人にもわからないし、国際的にもちょっとわかりにくいんだろーと思います。どう翻訳するのかというですね。あえてこなれの悪い翻訳をしたら、日本の国内的な矛盾を世界にさらす、そういう結果になると思います。それはこの問題の解決にむしろプラスになるのかもしれませんが、やはり国側の言う被爆体験者という言葉の存在を認めてはいけないというふうに感じています。だから被爆者は被爆者なので、ここは、例えば、いまだに支援・救済を受けられない一部の被爆者とか、そういうふうにできないかなというふうに感じました。

それから、この 2 つ目は、この問題の普遍化という観点ですね。この部分は、支援の不十分さや救済されない被爆者への措置という国内的問題で終わっているかのように見えます。しかしこれは、この後に核禁条約でも論題になったマーシャルの核被害なども念頭において、この後に次のような一文を加えたらどうかなというふうに感じました。それは例えば、「その実現は核による実験や事故で障害を負ったり、故郷を追われたりした世界中の被爆者、この被爆者はいわゆる両方の意味の被爆ということで、この被爆者の支援や、救済の先例となるはずです」というふうに入れたら、放射性物質に関する実験や事故の被害者全体を含めたものにふえんできて、世界に訴える意味も大きくなると思います。実際にニュークリアビクティムズという言葉は、検索してみると、ビキニにも福島にも使われていて、世界に使用例があるわけですね。そういったことで、世界に訴える意味もまた強くなるというふうに感じています。前回も出たように、原発問題はやはり切り分ける必要があるという考え方もありますけれども、そういうことも十分

承知していますが、個人的には被害者が存在する以上、この問題も含めていいのではないかなというふうに考えています。

それから48から49行目のところですが、「現在この地球上で多くの尊い命と日常を理不尽に奪う戦闘が続き、核戦争の危機が高まっています」という文言がありますけれども、これは20行から27行の趣旨と非常に、これは繰り返されている感じなので、冗長なイメージを避けるために、26行目に出てきた危機的事態という言葉を受ける形で、例えば「私たちの直面している危機的事態は、より現実味を帯びてきました」というふうに、少し展開させる形で繰り返していくと、冗長なイメージがなくなるのかなというふうに感じました。それから、先ほども出た超越という言葉が、意味は分かったんですけど、何かしっくりこなかったのはありました。

それから、54から65行目のところですが、平和をつくる動きのところはですね、例えば、前回言いました、「傷だらけの手から」という詩の一番最後には、こういうふうに書いてあります。「傷だらけになったこの手から、明日の平和を少しずつでも編んでいこう」というふうに言っているんですけど、こういう詩句も使えないのかなというふうに感じました。

それから最後ですが、54行目のところ、「動きが活発になっています」とありますが、これは例えば、高校生ももう四半世紀の活動を続けていますし、大学生もユース非核特使などはもう十数年の活動をしています。そういったことを踏まえて、「長年の動きがさらに活発になっています」というふうに加えていただければと思います。ここはちょっと譲れない感じがしましたので、よろしくお願ひします。以上です。

委員

はい、ありがとうございます。第3回目のこの2回目の素案を拝見したときに、かなり完成度が高くて、しかも2回目の会議の時に色々な意見が出た中で、よくぞここまできれいにまとめ上げてくださったなと驚いたというか、すごく嬉しくなったというのが感想です。本当にありがとうございます。とりわけですね、前回提案させていただいた「国境や宗教、人種、性別などの違いを超えて」というところに世代という言葉も入れたらどうかという提案がちゃんと入っていたことを大変うれしく思いました。そして、その上でですね、私からは2点提案をさせていただきたいと思います。

まず25行目のところですね、「中東における武力攻撃が深刻化している」とありますが、ここはイスラエル・ガザ紛争という理解で間違いないでしょうか。おそらくそうかなと思うんですが、ここちょっと気になったポイントの理由として、この直前のところに、「ロシアのウクライナ侵攻に終わりが見えず」と書いているので、この中東における武力攻撃というところも、具体的に言ってもいいのではないかなと思いました。ただ、決してですね、例えばイスラエルを名指しで批判とか吊るし上げとか、そういう意味や意図ではないということは強調しておきたいと思います。

そして次、2点目なんですけれども、68行目にあります、「長崎を最後の被爆地に」というところです。ここがですね、位置がここでいいのかちょっと悩ましいなと個人的に思いました。貴重なメッセージですよ。長崎を最後の被爆地に」というのは、長崎の発する一番強いメッセージでもあって、貴重なメッセージだと思うんですけども、この67行目から71行目を読む中で、この貴重なメッセージが少し唐突に出てきたような印象を受けてしまいましたので、例えばですけど、71行目の最後ですかね、例えば最後にもってきて、よりこの「長崎を最後の被爆地に」というメッセージにインパクトを与えるかたちにしてはどうかというふうに思いました。入れる場所としてはこの最

後のパラグラフで私はいいと思いました。私からは以上です。

委員

詩からの導入というのは非常にやっぱり効果があるという風に思います。15行目の悲惨さを訴えた詩人というのは、長崎の詩人とした方がいいかなというふうに思います。それから44行目ですけれども、被爆体験者の部分が言及される所ですけれども、先ほどお話もありましたように、長崎市自体も今、力を入れている被爆体験者の救済の問題というところで、今年は特に式典の後に首相が被爆体験者と面会するという歴史的な場面もあるというところ、救済が非常に重要な局面にきているというところからも、もう少し厚めに書いてもいいのではないかと思います。放射線の影響、被害を受けた、あるいは受けた可能性が高い被爆体験者の救済というところで、政府の姿勢というのは依然非常に消極的なところでもありますので、例えば、ここでいうと「被爆者への援護のさらなる充実、そして被爆者援護から除外されている被爆体験者について、政府は本格救済に踏み出すよう強く要請します」ぐらいのですね、文言が今回あってもいいんじゃないかと思います。それから、福島の問題ですけれども、平和宣言における福島の原発事故の言及については、2011年から起草委員会で、本当に大変な議論を経て、当時はより安全なエネルギー社会の実現に向けて、原子力に代わる再生可能エネルギー開発への努力を盛り込むというかたちでスタートしたものであったと思います。以来、昨年までボリュームは抑えてきながらも、福島という言葉も盛り込んできた経過があると思います。核とか放射線の被害を知っている被爆地が、その姿勢を保ってきたというところがあると思いますので、今回、最終案で福島の名称が消えているというところで、その理由が何か、ちょっとお尋ねしたいなと思います。

また、現在も原発事故の放射線被害問題というのは続いておまして、やはり大きな視野で連帯を表明していくということは重要であるかなと思います。併せて、広島、沖縄の名称も消えておまして、それについてもちょっと判断をお尋ねしたいと思います。いずれも、戦争や原爆を考える上で、非常に重要な地であって、個人的には言及すべきではないかと思います。

それと、前回も意見しましたが、まず、米国等に出てくる原爆投下の正当化論について、厳しく批判するということが重要ではないかと思っております。起草委員会の期間中に米国の議員などから発言があって、ニュースにもなりました。米国もロシアも中国も、全ての核兵器を廃絶し、使用させないということが被爆地の主張でありまして、だからこそあのとき原爆を投下したことは正当だったという論調についてはですね、これも場合によっては核兵器使用は正当化できる、ということになってしまいますので、非常に原爆問題の根幹にある論調だと思いますので、できれば強い反論の言及が必要ではないかと思っております。

最後に他の委員さんからも出ましたけれども日本政府の軍拡路線への懸念も盛り込むべきだと思います。やっぱりアメリカの世界戦略の一部に、自衛隊が補完されるかたちになってきておまして、その防衛装備品の分野でも、日本は後方支援を拡充するという流れにあります。米国の管制も大規模補修まで行うというような流れでありまして、その大前提として米国がどこまで戦争しようと、日本政府としては、国民を戦争に絶対に巻き込ませないという、あらゆる努力をすべきでありまして、やはり、懸念を示す必要があると思います。先ほど具体的な例示も委員からありましたけれども、やはり憲法の辺りで、せめて「軍拡路線ではなく」ぐらいの表記は必要ではないかと思っております。以上です。

委員

はい、私は全体としては、よくまとめていただいているのではないかなと思います。その中で1点だけ、先ほど出られましたけれども、67と68行目のところ、「哀悼の誠を捧げる」というところと、「長崎を最後の被爆地に」というところですね、ここに入って前後の関係性で、多少とってつけた感が少しあって、市長は上手に切り分けて読まれたので、聞いてみたらそうなかったですけれども、ただ、どちらも大事なフレーズだと思いますので、これは私の案ですけれども、せつかく63、64、65行目と続いてきていますので、65行目の後に、例えばですけれども、「そして未来永劫」とか、あるいは「永久に」という言葉を入れて、「そして未来永劫長崎を最後の被爆地にしていかなければなりません」という文言をそっちにつけて、そして哀悼のところも非常に大事なところで、これも前に入っていないので、ここに入れていただいていた方がいいと思いますけど、「原子爆弾でなくなった方々に心から哀悼の誠を捧げるとともに、長崎は」という69行目につないでいけば、文章としてまとまっていくのかなという印象を持ちました。はい、とりあえず私はそこです。

委員

前回から様々な話をこのように反映していただいております。すごく完成度が高い状態だなと私も感じました。特にこのやっぱり詩人の福田須磨子さんのこの「原爆を作る人々に」という詩の部分からですけれども、委員長が先ほど読み上げられているのを聞いて、特にこの29から33行目までは決意のように感じましたし、魂からの訴えというのは、50年後の私たちにも胸に迫るものがあると感じました。「原爆を作る人々よ」というものに対して、61行目のところでは、「平和をつくる人々よ」というところに対比されていて、やっぱりこの若い人たちの動きですとか、この長崎の人たちはやっぱり平和をつくる人を増やして、そしてこの世界最後の被爆地にというふうな共通のところがあるので、そういったところも今年らしく反映されていると思います。今回の平和宣言を機に福田須磨子さんの作品を見る方も増えたらいいなと感じました。

1点感じたのが、47から53行目までは世界中の皆さんに訴えていて、54から59行目まではきっと長崎のことを伝えられていると思うんですけども、このままでいいと思うのですが、57行目の「世界の若い世代が連帯し」となっているんですが、この主語は「世界の人たち」というよりは、「世界の若い世代と連携し」というようなかたちで、主体的に長崎の人たちが世界の人と一緒にやっているというような動きになってもいいのかなと感じました。先ほど、委員から47行目の地球という1つの星に住むという提案もありましたけれども、私もそれに賛成で、やはりまちというと陸続きといえますか、地続きのイメージがあるのですが、他の委員からも、例えばマーシャルの核実験とかそういったものって海洋、海につながっていますし、そういったときは星という方が想像しやすいのではないかなと感じました。

62行目のところで、高校生平和大使の皆さんが言っている、「微力だけど無力ではない」、これは2022年も入った言葉ではあるんですが、式典の時に本当に一緒にその式典を見ていた高校生たちが涙していたので、やっぱり励ましつつでも長崎らしい1つのみんなの決意だというような形で、例えば62行目のところ、「たとえ一人ひとりの力は小さくても」ではなくて、「一人の力は微力だけど無力ではない私たちが」というようなかたちでつないでもいいのかなというふうに感じました。以上になります。

委員

ありがとうございます。全体的にとっても一貫性があって、理解しやすい流れになっていて、すごくまとまっているなというふうに思っています。一貫性をつくることの結果でもあるのかもしれないですけども、結構強い印象を受けて、それぐらいの強さがなければ、今の世界の流れに抗えないというのはあるんですけども、やはり長崎らしい祈りの要素であったり、もっと柔らかさというか、そういった要素が少し感じられると、より長崎らしいなというふうに感じています。大きく変えるというよりは、本当に細かな言葉の使い方で変わるのではないかという感覚を持っております。そういうことを踏まえて何点かあります。

かなり他の委員の皆様と重複するところでもあるんですけども、まず42行目のところの、「日本国憲法の平和の理念を堅持するとともに」というところなんですけれども、結構さらっと入っているフレーズながら非常に重要な言葉だと思っていまして、そもそも日本は平和憲法を掲げているのだという当たり前のことを忘れそうになるような状況にあるのかなと思っているので、そこに対してしっかりと、そもそも私たちはそういう憲法をもっているんだということを念押しするような言い方が、さらっと言うてしまうよりもいいのではないかというふうに感じました。

それから52行目の「SDGsの目標を超越した」というところは、先ほど委員がおっしゃったことと同じ印象をもっていまして、SDGsもサステナブルな、世界をつくるための目標というところでは共通していると思いますので、それよりもというニュアンスではなく、一番ベースにあるというニュアンスで書いた方がいいのかなというふうに感じました。

それから58行目の、「そんな挑戦が各地で始まっています」という部分は、まず挑戦という言葉が少し、強いなと思っていて、若い方たちは本当にもっと自然体で当たり前のこととしてより良い社会を求めて活動していると思っているので、その部分と、これは本当に長く長崎の中で続いていることだと思うので、今始まったことではないという言い回しの方がいいのではないかと思います。それから、「持続可能な平和な未来を築くための希望の光です」という部分ですけども、ちょっとニュアンスが違ったら申し訳ないんですけども、「希望の光であり、平和の文化の始まりです」というようなかたちで、その広がりをごこの中で見せておけば、最後に平和の文化を世界中に広めるところにつながりやすくなるかなというふうに感じました。

それから、62行目以降の文章が、「微力だけど無力じゃない」という言葉とほぼ同じであることを考えると、このフレーズをしっかりと言葉にして発言することによって、高校生平和大使たちの活動であったり、それへの思いというところが、長崎の言葉としてしっかりと刻まれるということもありますし、そもそもこの「微力だけど無力じゃない」という言葉は、本当に強い言葉だというふうに思っているのです、その言葉を入れるという委員の皆様のご意見には賛成をしております。

あと最後、これはちょっと全体の流れの中でもしかすると、今までなかった部分でもあり、入れることによってちょっと難しくなってしまう可能性もあるかなというふうに思うので、ジャストアイデアという感じなんですけれども、この起草委員の中でオープンハイマーに関する議論が1回目結構ありましたけれども、やはり核兵器を実際に使用した後につくった人や落とされた人たちの胸の痛みだったり、良心というところが実際にはあって、それが振り返られているタイミングでもあるのかなというふうに感じたときに、戦争を起こそうとする人たちに対して、完全に良心のない悪人だという言い方に、実際に起こってしまった歴史の中で、そういった良心の痛みというところが実際に振り返られているんだという事実を、どこかに入れることができないのかなというふうに感

じました。35行目以降の段落のところで「あなたの良心で感じてください」というものもありますけれども、そういった過去の歴史の中から学べるものというところを実際に戦争をしようとする人たちにおいてもあったという事実を何らかの形で入れられないかなというふうに感じました。私の方からは以上です。

委員

第1回、第2回の起草委員会を経て作られましたこの素案は、完成というほど本当によくまとまっているなという印象を受けています。まず感想になるのですが、特に私はこの素案の流れが本当に素晴らしいというふうに考えています。

具体的に申しますと、福田須磨子さんの「原爆を作る人々よ」で平和宣言が始まっています。その後、核兵器が存在し、核戦争の危機が高まっている世界の厳しい現状が述べられています。続いて、核保有国と核の傘の下にいる国の指導者への呼びかけがあり、若い世代を中心とした平和な未来を築くための動きが書かれ「平和を作る人々よ」を迎えます。まさに今年の平和宣言は、世界の厳しい現実と対峙しながらも、確かに一歩ずつ平和の文化が世界に広まり、核兵器廃絶と世界恒久平和が実現する道筋がこの中で表現されているなという印象を受けています。そこで細かいところになるのですが、2点気づいたことを挙げさせていただきます。

1点目です。37行目の「被爆者の声に耳を傾け、その痛みを一人の人間としてあなたの良心で感じてください」のところになります。被爆者の方が語られているのは、痛みや苦しみだけではなく、20行目にありますように、「世界中の誰にも二度と同じ体験をさせない」との強い決意に導かれる、誰よりも熱く、そしてリアルな平和への思いもあるというふうに考えています。その痛みの後に、平和への思いを付け加えてみるのもいいのかなというふうに考えました。

2点目です。69行目から71行目の最後の宣言のところになります。一文が少し長いような印象を受けましたが、冒頭の市長の力強いお言葉を伺い、思っていたよりも文章の長い印象は受けなくなりましたが、より力強いメッセージとするために、「平和の文化を世界に広め、」で一旦文章を切り、「核兵器廃絶から最後の宣言をします」をより一層力強く市長に宣言していただいてもいいのかなと考えました。その上で、先ほどより出ております「長崎を最後の被爆地に」というメッセージを一番最後に持ってきて、力を込めて宣言していただきたいなというふうに考えました。以上です。

委員

はい、ありがとうございます。まず最初に事務局の皆様、この文案の取りまとめ、大変ご苦労されたと思います。冒頭の福田須磨子さんの詩、非常に効果的に使われていると思いますし、前回は話に出ましたが、被爆者の苦悩に対する表現ですね、非常に強く印象に残る言葉で、そして被爆者の苦悩というものが健康被害だけではないところをしっかりと描いている。非常に鮮やかな表現だと思っております。こうしたところもあって、「平和をつくる人々よ」というふうに言葉がリフレインしていくところも、非常に全体として完成度が高いというふうに思っています。今回、文案を読んでいの中で、やはり全体を通しての非常に強いメッセージは、核兵器のある世界、この今の世界の厳しい現状というものがあながら、しかしやはり一人ひとりの人間に対する眼差しというのを忘れてはいけないというところが、今回の全体の宣言の大きな力強いメッセージじゃないかなと思っています。それは言葉の端々に出てくる、もちろん福田須磨子さんという個人の体験から、被爆者一人ひとりの苦悩というところに思いを馳せる、それから37行目のところにあります、被爆者の声に耳を傾け、その痛みを1人の人間

として受け止めるように指導者に訴えていると。そしてSDGsの話も後半に出てきますけれども、まさにSDGsというものが誰も取りこぼさないという、一人ひとりの人間をといてところを、全ての物事の社会の情勢の中で、政治や国の意向が中心ではなく、人間をその中心に据えようという、まさにそういった今の世界の向かうべき方向性を示しているところに、というところでメッセージの一貫性というものが大変良いと思っています。その上でなんですけれども、やはり人の痛みというところに思いを馳せたときに、今のウクライナの情勢ということももちろんですし、また今回、イスラエルという国の言葉が削られたということ、1つの大きな前回からの変化ではあるというふうに思っておりますが、今のイスラエルにおいてガザへの侵攻、ガザ情勢の深刻化というもので、凄まじい人権侵害というものが行われているわけです。したがって、もちろん全体として核兵器の問題として語っているという文脈は重々理解をしていますけれども、しかし、やはり人間の痛みを知る、一人ひとりの人間に戦争や原爆、核兵器をもたらず痛みを知る被爆地だからこそ、こうした人権侵害を看過することはできないというのを長崎が訴えるということも必要ではないかと思えます。長崎は看過できない。そして私個人としてはやはり即時停戦を求める。そのうえでこの既にかかれていたような武力ではなく対話と外交努力により平和的な、より長期的な持続的な解決を目指すというところをやはり何らかのかたちで盛り込めないかというふうに思っています。それは先ほど委員が心配されたように、どこかの国を名指しして批判するというのではなくて、やはり今、国際法違反かどうかということ、イスラエルの状況、日本政府もなかなか明言を避けているところでもあるかとは思いますが、しかし明らかに日々どれだけ多くの子どもたちを含めた、そうした人々が苦しんでいるということは、明確な事実であるわけです。そうしたことを踏まえて、被爆地としてやはり発すべき言葉があるのではないかと、それはいわば少し大げさかもしれませんが、被爆地の道義的責任というところにもつながるのではないかと、現状を踏まえて思っているところです。ただ、もちろん、そういった停戦のことに言及するといったようなことに関しては、他の委員の方もまた長崎市のお考えもあると思えますので、あくまで私の個人の考えとしては、その点を述べさせていただくということで、ご承知いただきたいと思えます。

あと細かい部分になりますけれども、私も一貫して、今の核禁条約の流れの中で、核被害者への視線というものを入れるべきじゃないかと今回思っていますので、先ほど委員がおっしゃられた文言を追加するというところに私も支持をいたします。48、49行目が私も重複していると思うので、何かここをもう少しですね、話を展開し、さらに強い効果的なメッセージにしていくところにはできないのではないかと、ちょっと具体的な案はないんですけれども、そのように思いました。ということで、この全体としての受ける印象というものは、とてもとても一貫した、非常に力強い長崎ならではのメッセージ、長崎にしか出せないものになっていると思えますので、あと一歩、私としては踏み込んだ表現があれば、より強いものに、今だからこそということになるのではないかと、いうふうに思ったところです。以上です。ありがとうございました。

委員

今回の第3回目のこの案はもうほぼ完成していると私には読めました。ただですね、過去数回の平和宣言と比べてですね、1つの傾向としては国が抱えている、例えば軍事予算の拡大とかですね、先ほど委員がおっしゃったようなことですね。それから憲法の理念を続けるということは常に文言としては入っているんですけども、それ以外の多国間の軍事協定みたいなものですね。あるいは少し広がりつつある国際軍事協力ですね、オーストラリアとかインドとかですね。そういうところも入ってきているような大きな

流れ、平和を維持していくために国際的には方向性が出ていることに対する我々の考え方がまだ明確に表現されていないとか、色々なことがあって、非常に平和宣言としてはまとまって一定のレベルを保っているとは思いますが、ここで触れられていない文言の方に意味が出てくるような経過をこの数年とっているんじゃないかなと思います。この傾向でいいのかどうかは、よくよく考えてみないといけないんじゃないかなと思います。今回はこれでよろしいんじゃないかなと思っていますけれども、もうちょっと長崎の平和宣言は突っ込んだ、少し尖ったところがないといけないんじゃないかなと思います。以上です。

委員

ありがとうございます。前回、色々な意見が出たのを、非常に苦勞なされたのではないかと想像いたします。どうもありがとうございました。大きなところでは、特に変更はないんですけれども、いくつか、修辭的な問題が多いですけれども、引っかかったところを申し上げたいと思います。

一番大きいところはですね、福田さんの詩を私は読んだことはなくて、それで前回紹介があって、長い詩でということがあってですね、この2度目に引用された30行目からの4行がどういう文脈なのかというのはやっぱりよくわからない人にとっては非常に理解ができないのではないかとこのことをまず感じました。私自身も「この手の中にある一切を放棄するのだ」というのは、この4行、誰に向かって言っているんだろうというのが、そもそもちょっとわからないんですね。それで、詩を初めて読み返してみたんですけれども、ここも「原爆を作る人々よ、今こそためらうことなく」の前の1行は、原爆を作る人々よというふうに呼びかけているし、この詩全体が、やはり言葉がリフレインされているような詩なので、詩を知っている人にとっては、この4行という意味は十分伝わるのではないかと思います。やはり、この宣言文の中だけではやっぱりそこが伝わらないというふうに思いました。ですから、「原爆を作る人々よ」という1行を、この30行の前に入れた方が伝わるし、そのことによって35行から福田さんの頭の中にある原爆を作る人々、広く取れば、それは私たちでもあるという取り方もできると思うんですけれども、ここではやや絞られた訴えになっていて、それが35行からの核兵器国と核独裁のもとにいる国の指導者の皆さんというのにつながっていく、そういう訴えの言葉だというふうに、読めるので、1語やはりそこでは入れた方がいいのではないかなというのが1つ、大きなところでは感じました。

それから、もう1つ大きなところでは、先ほど何人かの方々が言われましたけれども、48行目、49行目というのは、既に22行目ですかね、現在の危機ということで、戦争の危機というのは25、26行目に述べられているので、ここはむしろ取っちゃって、地球市民の言葉でいきなり50行目に続けても十分伝わるのではないかと思います。だから48、49行目はなくていいということなんですけど、そのとき、50行目はちょっと文言を変えて、「一度今ある戦争が大規模核戦争に発展するとどうなるのでしょうか」というふうにすれば、より地球市民への問いかけというふうになると思いますので、そういう修正が可能ではないかというふうに思いました。

それから3つ目、これも何人かの方が既に言われましたけれども、日本国憲法の平和の理念を堅持するというのが、さらっと言葉としては出てきているんですけれども、やはり今の情勢を含んだ言葉になる必要があると思って、先ほど委員からは、自らの軍備縮小を行い、日本国憲法の平和の理念を堅持するという提案がありましたし、委員からは、「せめて軍拡ではなく」という言葉を入れるという提案がありました。私は、もう少し元へ戻る、自分たちの気持ちをリフレッシュするという意味で、「戦争への深い反

省によって生まれた、非戦を誓う日本国憲法の平和の理念を堅持するとともに」というふうには、今、日本が進んでいることへの危惧を、もう少し深いところから表現できるかなというふうにも思いました。とにかくここには何か、やはり、今このことを言うことの背景がわかるような言葉が必要ではないかと思えます。

それから、あとは細かいことなんですけれど、69行目にこれまで全部調べたわけじゃないんですけども、広島の人々と共にという言葉があったと思えますし、平和ということを考えて、やはり沖縄というのは特別な市民の体験のある場所ですので、やはり広島、沖縄の人々をはじめ、平和をつくるすべての地球市民というふうに、ここで平和をつくるという先ほど61行目で使った言葉を踏まえて、やっぱり広島、沖縄という言葉は入った方がいいんじゃないかというふうに思いました。

あとは25行目に、今年の8月9日に読まれるということを考えてときに、ロシアのウクライナ侵攻に終わりが見えないというのは、多分間違っていないと思えますが、中東の状況を言うときに、武力攻撃が深刻化しているという表現は、もしかしたらタイミングが悪い可能性があるという気がします。次のフェーズに移っている可能性がないとは言えない8月9日だと思うので、ここの表現はちょっと工夫をする必要があるのではないかと。例えばですけども、中東の武力攻撃による悲惨な状況が続く中、という表現ならその状況はますます悲惨に続いている可能性はあると思えますので、何か工夫が必要だというふうに思いました。

あとは、40行から41行目というのは、大事な言いたいことを、形容句にしてしまっている感じがしますので、日本政府に対して「核戦争のない世界を、真摯に迫及する姿勢を示すべきです」というふうに言い切って、そのためにも禁止条約への参加をした方が歯切れがいいし、強くなるのではないかと思えます。

あとはですね、言葉の問題として、「人道的な規範」という言い方、二度出てくるんですけど、これはこれでいいのかなと。これは自信がないんですけど、「人道的な規範」、「人道上の規範」という言い方と、どちらがいいのかなということ。それから26行目で、この二度目に「人道的な規範」というふうに書いてあるんですけど、ここはもう少し、「これまで守ってきた核兵器不使用の規範」というふうに、上の言葉を正確に言った方がいいのではないかというふうに思いました。以上です。

委員長

はい、どうもありがとうございました。一通り、委員の皆様からご意見をいただきました。これからは、他の委員の皆様のご意見を聞かれたうえで、改めてご自身が発言されたことに対する補足であるとか、あるいは他の委員のコメントに対するご意見とかコメントについて伺えればと思えますが、その前に、複数の委員の方からお話がありました「微力だけど無力じゃない」というフレーズですね。私も色々、若い世代の皆さんと一緒に活動する中で、本当にこの言葉というのはパワーフレーズというか、重要なフレーズだと思っております。実は今の案の62行から63行目というのは、まさにそれをちょっとリフレーズしたような、そういう文ではあります。そういう意味では、そういう思いは込めているつもりではあったんですけども、むしろリフレーズせずに、そのままのかたちで使った方がより伝わるのかなと。そのうえで、うまくそういうことを長崎の若者は取り組んできたということも含めて、うまいかたちでこのパワーフレーズを使えたらいいのかなと個人的には思いましたので、ちょっとそこは考えたいと思えますが、まさにそういった若い世代の中心である委員、この「微力だけど無力じゃない」このフレーズの扱いについて何かコメントあればお願いできますか。

委員

そうですね、私自身もここは読んでいて、「微力だけど無力ではない」という言葉の意味を込められたんだろうなと考えたんですけども、やはりこの言葉というのは長崎はもちろんのこと、日本各地でも広まっている言葉だと思いますので、やはり入れていただきたいなというのと、やっぱり特に若い世代とかがっていうと、まだ活動したいけどできない人たちとか、興味はあるけど一歩踏みだせないという人がいる中で、自分たちが例えばニュースを見ることであったりとか、少し調べることとか、そういったことっていうのも平和への一歩になるんだっていうところが、この「微力だけど無力ではない」というところにつながると思っているので、この言葉を入れることで、多くの人にとって平和への道に歩む一歩になるのではないかなと考えています。

委員長

はい、ありがとうございました。他にこの微力だけど無力じゃないというフレーズに関して何か他にご意見がある方がいらっしゃいますでしょうか。今いただいたご意見も踏まえながら、また扱いについて今後考えていきたいと思えます。ありがとうございます。

事務局へのご質問ということで、委員の方からご質問いただいたかと思えます。今まで言及されてきた福島への言及、今回盛り込まれていないということについて、その理由についてお尋ねがございました。その点でございませけれども、昨年も一番最後のパラグラフのところで、平和を築くうえでの連帯という中で連帯の相手ということの頭出しの中で広島、沖縄、そして福島を含むというかたちでの例示ということで福島の名前を入れさせていただいております。今回はですね、これまで昨年は具体的に列挙させていただきましたが、世界各地で連帯の対象、色々な側面で連帯の対象が多いというふうに感じておりますし、また前回の議論の中でも、例えばこういったところを入れるべきじゃないかとか、あるいはこれを入れるとなると、ちょっと他もという話も出てくるんじゃないかとか、そういうご意見もいただいたところでございます。そういうご意見も踏まえながら、今回はより包括的に地球全体に呼びかけるというかたちで、あえて個別の具体的な列挙を入れないかたちにしております。そういう中で、福島もそうなんですけれども、広島、沖縄も含めて、今回は具体的な列挙を入れていないというかたちにしております。削除の理由としてはそういうことでございます。そこを補足させていただきたいと思えます。それを踏まえたうえで、この件について、あるいは他の件でも結構ですけれども、コメント、ご意見等ございますでしょうか。

委員

今の福島の問題、お答えいただいてありがとうございました。今、委員長が言われたことも受け止めますけれども、福島原発事故が発生してから、長崎の平和宣言では、福島のこの問題をしっかりと受け止めた宣言を続けてきたということで、ついに福島の文言が今回なくなるということについては、ちょっと若干違うメッセージが福島や関係する方々に伝わるのではないかなという危惧もあります。問題は終わっておりませんし、ここの問題、いわゆる核兵器の問題とは少し違うという中で、福島をどう捉えていくのかと、長崎がというところでの議論があり、そこを位置づけてきたというところで、ちょっと世界で連帯の対象が多いとか、そういったことで福島は入れませんということになると、若干納得し難いところが私自身はあります。

委員長

ありがとうございます。他にご意見ございますでしょうか。今いただきました福島県については、またその委員のご発言も踏まえまして、また最終的にどういうかたちにするか、ちょっと推敲しながら考えていきたいと思えます。そういう中で、思いとしては、決して福島に対する我々連帯の思いがなくなっているわけではなくて、そこは決して変わりません。そういう文言も含めながら、ここにより包括的なかたちで書かせていただいているつもりではございます。そこがうまく伝わっていないとすれば、そこをどういうふうには書けば伝わるのか、そこは改めてしっかりと考えていきたいと思えます。ありがとうございます。

委員

今のお話ですと、69行目の平和を築く力になろうとする地球市民との連帯というところに、おそらく全ての各地の方が含まれているのかなと思ったときに、平和を築く力になろうとするという言葉が少し抽象的で、例えば福島とかだと、なかなかイメージする方も少ないのではないかなというふうには感じましたので、この辺りの言葉の使い方というところで、どういうものが内包されているのかというのが分かるようになっていくのかなというふうには感じました。

委員長

ご意見ありがとうございます。踏まえさせていただきたいと思えます。ありがとうございます。他に何かございますか。

委員

先ほど、委員からもありましたけれども、31行目のところで福田須磨子さんの「手の中にある一切を放棄するのだ」というのが、初めて聞いた方はちょっと唐突かもしれないので、それが原爆であるということが分かるように、先ほどおっしゃったように「原爆を作る人々よ」を加えるか、それか福田さんの詩、「原爆を作る人々に」の中でというようなかたちで、話されてもいいのかなと思えました。先ほど委員からもありましたけれども、戦争、そして核を使った人の手を休めて平和をつくろうというのは、福田須磨子さんも詩の中で訴えているし、今現在それを使った、人物に対して、長崎だけでなく、若い人たちですとか、アメリカの人たち、世界の人々が注目して痛みを共有しているというところは、今年らしいのではないかなというふうには感じました。以上です。

委員

先ほど委員の方からも出された、沖縄、福島ですね。特に沖縄の現状というのは、私たち本土といえればあれですけども、こっちに住んでいる人たちがもっと考えなければならぬ問題ではないかと思えます。特に、日本の0.6%の中に70%の基地が集中している。そんな中で色々な沖縄の人たちが苦しんでいる、被害に遭っているということです。それを日本の政府が隠蔽をしとったということがはっきりしてきたわけです。それとか沖縄の警察もそういう事件を公表していなかった。やはり今こそ沖縄のことを私たちが考えると同時に日本政府に考えてもらいたいということで、沖縄の文字も入れてほしいなと思えます。以上です。

委員

先ほどの微力だけど無力じゃないというところに焦点を当てて、私は思ったことがあるので、ちょっと述べさせていただけたらと思えます。今回の素案では、福田須磨子さんの詩、それから「微力だけど無力じゃない」というフレーズ、そして最後に「長崎を

最後の被爆地に」というこのメッセージ、この3つが結構大きなポイントとして述べられている素案になっているかなと思います。それを考えたときに、メッセージ、一番私たちが伝えたいこと、キラーフレーズというか、インパクトを残したいところをどこに置くかという視点でも考えたらいいのではないかなと思います。それは決して例えば、「微力だけど無力じゃない」というフレーズを入れないとかそういうことではなくて、そのフレーズを文章として落とし込むとか、どういうふうに入れるかを考えながら、色々なキラーフレーズを盛り込みました感がないような感じにしたらより良いのではないかなと思いました。そこは事務局の皆様でご検討いただけたらと思います。それから先ほど委員からもご発言がありましたように「福島の方々とか沖縄、広島の方々と連帯」というところですけども、そこは県の名前とかを出すのが難しい。包括的に連帯や協力をしていきたいということであれば、例えばですけど、「戦争の被害者とか原爆の被爆者」、それから先ほど委員からですかね、ご意見があったような「核の被害者、ニュークリアビクティムズ、広い範囲での核の被害者」というふうに言ったら、より良いのではないかなというふうに思いました。私からは以上です。

委員長

はい、ご意見ありがとうございました。先ほどのそういうキラーフレーズの入れ方については、事務局の方でまた工夫について考えたいと思います。ありがとうございます。他に何かございますでしょうか。はい、委員お願いします。

委員

すみません、今回のとは直接関係ないんですけども、昨日の新聞の記事、ご覧の方もいらっしゃると思うんですけど、日経の記事でですね、岸田首相が5月の月刊誌のインタビューの中でですね、2023年に中学生と対話をした時に、なぜ首相になろうと思ったのかに対して、一番権限の大きい人だからという中で、じゃあそれで記者の質問で、具体的にやりたいことは何ですかという質問に対して、首相は核兵器のない世界の実現をあげたと。そして、やめてほしいことは何かと、核兵器による殺傷や戦争だと訴えたと、こういう記事が出ています。どこまで本音かどうか、それは言葉だけだといわれる方もいらっしゃるかもしれないけれども、しかしそういう発言があったということは、昨日の記事で出ておりますので、ご紹介をしておきます。それをどう判断するかというのはまた別の問題です。

委員長

どうもありがとうございました。まさに総理も同じ思い、同じ方向性を向いていらっしゃるということだと思いますので、そういう思いも踏まえながらまたしっかりと考えていきたいと思います。ありがとうございます。他に何かコメントがございましたでしょうか。委員お願いします。

委員

全く文言の修正云々ではなく、よく聞かれる話として参考に聞いていただければいいと思います。例えば、福田さんの中で、新しく原爆を作る人々に手の中にあるものを全部廃棄するということは核兵器やめなさいということを基本的に言うわけですね。一方で憲法の議論が出て軍拡というのは別に日本は核兵器の軍拡をやっているわけではありませんね。そうすると核はもっている人はやめなさい、それから通常兵器も増やすのをやめなさい、というのを言葉で言うのは矛盾もしていないし言っていると思うんですけど

れど、長崎はどういうことを、世界を、目の前のことを見ながら、今年、訴えたいのかというのは、ぼやけるかなど。要するに現実を見て言っているのかという批判がきつと出るんだと思うんですね。出てもいいと思うんですが、そういう批判も想定しながら言葉遣いを考えて、広く共感を得られるようなメッセージになればいいかなというふうに思います。批判を恐れることはないと思うんですが、私の私見ですが、平和憲法というのはたかだか100年ぐらいで達成するようなことは多分考えていないと思うので、それから核兵器廃絶も残念ながらそういうところもあると思いますから、今年はこの現状で何をどう平和宣言で言うかということが毎年問われていると思うので、その視点は重要なのかなというふうに思います。

委員長

はい、どうもありがとうございました。しっかりとですね、まず長崎が何を訴えていきたいのか、その軸がありますので、そこはブレずに、それをどうやって伝えていくかということになってくるかと思えます。ただ軸としてはやはり核兵器のない世界の実現、そしてそれによって世界恒久平和を目指していく、そういう究極の理想があるわけで、そのための途中のプロセスとして、どういうことを訴えていくかということだと思っております。そういう意味で、また今回の平和宣言文の中で、しっかりとそれが伝わるような表現を考えていきたいと思っております。ありがとうございます。

他に何かコメントがございますでしょうか。こちらの方から、先ほどいくつかご意見があった中で、中東における武力攻撃という中で、イスラエルというのをはっきり言及した方がいいのではないかと。前にロシアというのを言及してあるということもあって、同じようにイスラエルというのも言及したらどうかというご発言もありましたが、基本的に、これも先ほどの広島、沖縄、福島の話とちょっと似たような話になるんですけれども、個別に言っていくと、あれを入れたら、いいんではないかという話とか、逆にこれを入れることによってバランスがとれないんじゃないかとか、色々な話になります。それによって、かえって訴えたいことが霞んでしまうというところがありますので、そこははっきりと訴えたいところを包括的に言うという中で、基本的にはそういう個別のところは入れておりません。ただ、ロシアが入っているのは、ウクライナ侵攻という、やっぱりその事象を表現するときに、こういう表現になっておりますけれども、ただ、例えば「ロシアの」という言葉は入れなくても、ウクライナ情勢に終わりが見えずという言い方もあるのかもしれないかもしれません。だから逆にロシアをとるというのもあるかもしれません。そういうところの工夫はまたこちらの方で考えたいと思います。他に何かございますでしょうか。委員お願いします。

委員

私は中東はイランとイスラエルの対立も武力攻撃していますから、あまりイスラエルだけに、むしろ限定しない方がいいのかなと思いますね。

委員

ここは核の使用というところの文脈の中で、このロシアとイスラエルの名前があがってきているので、色々な紛争とか侵略というのはアフリカなんかでも起こっているわけで、何が違うかという、やはり核保有国による色々な侵攻・攻撃ということなので、違いを出した方がいいのかなと。あえて出すのであれば、核保有国による侵攻といった、いわゆる使用が危ぶまれるというニュアンスで、書けるんじゃないかなと思いました。

委員長

はい、ありがとうございます。他に何かご意見ございましたでしょうか。よろしいでしょうか。はい、それでは時間多少早いんですけども、これ以上ご意見ないようでございますので、起草委員会を終了したいと思います。今後は皆様からいただきましたご意見を参考にさせていただきながら、被爆 79 周年にふさわしい、平和宣言文を最後に推敲を重ねながら完成させたいと思っております。皆様方におかれましては、お忙しい中にもかかわらず、5月の第1回に始まりまして、今回で計3回開催いたしました起草委員会にご出席いただきまして、誠にありがとうございました。また、会議に参加される前に、しっかり検討していただいて、そして会議の場でご発言いただいたことに対して、心から改めて感謝を申し上げまして、今年の起草委員会を終了させていただきたいと思っております。どうもありがとうございました。